

氏 名 (本 籍)	ね っ とも み 根 津 朋 実 (新 潟 県)
学 位 の 種 類	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1801 号
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	教育学研究科
学 位 論 文 題 目	カリキュラム評価におけるゴール・フリー評価論の応用に関する研究
主 査	筑波大学教授 博士 (教育学) 田 中 統 治
副 査	筑波大学教授 小 島 弘 道
副 査	筑波大学教授 博士 (教育学) 宮 寺 晃 夫
副 査	筑波大学教授 博士 (教育学) 渡 邊 光 雄
副 査	筑波大学助教授 教育学博士 服 部 環

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 研究目的

この研究の目的は、わが国のカリキュラム評価に「質的な客観性」を確保するため、70年代に提唱された「ゴール・フリー評価」(goal-free evaluation, GFE)をカリキュラム評価論として検討し、その評価実践への応用を試みることにある。ここでいう「質的な客観性」は数量では表しにくい人間の判断を経た客観性を指し、GFEを理解するためのキー・ワードである。GFEは、70年代初頭に提唱された評価に関する方法論であり、計画段階で設定された目標にとらわれずに、人々のニーズと結果に志向する評価である。その提唱者、スクリヴァン (Scriven, M.) は、それまで広く行われてきた評価を「目標に基づく評価」(goal-based evaluation, GBE)と定式化し、これを批判して、GFEの必要性を強調した。筆者の問題意識は、①わが国におけるカリキュラム評価研究とりわけ実践研究の不足と、②カリキュラム評価論としてのGFE研究の不十分性にある。前者は、本来、カリキュラム開発と不可分の関係にあるべきカリキュラム評価が紹介の域を出ていないことによる。また、後者は、GFEを「目標なしの評価」とみなしがちな従来の研究の空白による。本研究は、これらの不十分性を補うため、わが国のカリキュラム評価およびGFEに関連する先行研究を検討するとともに、GFEの諸方法を独自に再構成し、応用的にカリキュラム評価を試行するものである。

2. 研究の課題およびその成果

以下、本研究が設定した研究課題とこれに関する成果を対応させながら要約すれば、次の通りである。

(1) カリキュラム評価における「質的な客観性」概念の規定

まずカリキュラム開発モデルにおける「羅生門的接近」を手がかりとして、「質的な客観性」について、それを「数量では表しにくい人間の判断を経た客観性」と規定した。さらに、カリキュラムを質的に評価するため、次の研究視角を新たに提示した。それは、①評価にあたり様々な視点を設けるような配慮すること、②様々な人々が多様な記述を試みること、および③具体的な事実を重んじ、過度の抽象化に陥らないことの三点である。

この視角から、文部省(現文部科学省)の研究開発学校によるカリキュラム開発を事例として、その研究報告書を分析したところ、多様な評価の視点をもたないため、限られた人々の関心のみに基づき、事実の詳細な記載

に比べて考察の部分が粗く、理論化にまで至っていない問題点を見出した。この結果をもとに「質的な客観性」を確保するためのカリキュラム評価論の必要性和その意義を明らかにした。

(2) ゴール・フリー評価論の体系的整理

60年代から90年代にわたるスクリヴァンの文献に基づき、GFEの方法論を中心に、これを体系的に整理した。これにより、「オープン・エンドの評価」あるいは「目標の無い評価」とみなされがちであったGFE論は、カリキュラムの当初の目標を参照せず、カリキュラムの結果と人々のニーズとに注目する評価論として解すべきことを示した。また、その具体的な方法として、ニーズ・アセスメント、チェックリスト法、および独立評価者の三つに注目し、このうち独立評価者がGFEの核心をなし、これがカリキュラム評価においてとくに応用可能であることを明らかにした。あわせて、代表的なカリキュラム評価論である構成的および総括的評価と、GBEおよびGFEとの関係を検討し、この両者がそれぞれが独立の関係にあり、相互に組み合わせが可能であることも明確にした。

(3) カリキュラム評価の質的な客観性からみたゴール・フリー評価の検討

上記の成果を統合して、GFEがカリキュラム評価において「質的な客観性」を確保しうることを理論的に明らかにした。「質的な客観性」の観点からGFEの方法を分析した結果、GFEの方法が「質的な客観性」の要件を満たすこと、これにより、従来、カリキュラムの副作用を発見するための一手法とされてきたGFEが「質的な客観性」を確保するものとして応用できる可能性が開かれた。さらに、わが国でGFEを評価実践に応用する場合、その研究状況に照らして、「評価者の立場」と「評価用具の開発」とを分けて検討する必要があることを指摘した。すなわち、独立評価者は評価者の立場として、また、ニーズ・アセスメントおよびチェックリスト法は評価の用具として、それぞれ別個に取扱うことができる。

(4) ゴール・フリー評価の評価実践への応用

続いて、GFEの方法をカリキュラム評価の実践において実地に応用した。まず、「関心を異にする人々の判断」をとり入れるために、三つの事例を分析した。すなわち、大学生による授業評価を用いた第三者的カリキュラム評価、中高一貫校の卒業生による「回顧的」カリキュラム評価、および教員集団の多元的な視点を用いた評価組織の分析である。その結果から明らかにされた点は、学習者による個別の授業評価に基づき各授業の上位にあるカリキュラムの水準で第三者評価を行うこと、学習者の経験をカリキュラム評価に組み込むこと、そして教授者集団のもつ関心の異質性を組織的に確保することである。これらの分析結果により、「関心を異にする人々の判断」をカリキュラム評価に採り入れ、人間の判断を重視する質的なカリキュラム評価の方法を提案した。また、先行研究をもとに、「わが国のカリキュラム評価のためのチェックリスト」(Checklist for Curriculum Evaluation in Japan: CCEJ)を開発し、これを用いて、ある工業系高校の「総合的な学習」のカリキュラムを試行的に評価した。その結果、これが汎用性の高い記述様式をもち、さらに事実の列挙にとどまらず他の教育実践と比較する際に有用であることを確かめた。

(5) カリキュラム評価研究への実践的示唆

結論として、評価者の独立性に関する議論およびチェックリストを用いたカリキュラム評価のモデルを、わが国のカリキュラム評価研究に関する実践的な示唆としてまとめた。まず、評価者の独立性を確保するため、GFEからGBEに進む順で両アプローチを接合することが可能であることが指摘し、次に、チェックリスト法を用いて、カリキュラム評価に関する「混合」モデルを提案した。それはGBEとGFEの長所を生かすための独自のモデルである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の独自性は、蓄積の少ないわが国のカリキュラム評価研究に対して「質的な客観性」の視点を提示し、これを確保するために必要な「ゴール・フリー評価」論による理論枠組を体系的に整理し、さらにその結果をもと

に評価実践への応用を試みたところにある。その論証の過程は理論と実証の両面において綿密であり、また、「ゴール・フリー評価」の諸方法を独自に再構成し、これを実際のカリキュラム評価に応用したところが高く評価される。この学術的な評価は、理論部論文において2000年度日本カリキュラム学会研究奨励費（2001年7月1日付）、実証部論文において関東教育学会研究奨励費（2001年10月27日付）の受賞によってそれぞれ示されている。また、全体の研究成果は、GBEとGFEという一見相反するアプローチを組み合わせ、両者の長所を活かすための混合モデルとして結論にまとめられており、それは今後カリキュラム評価に関する実践的研究に対しても有意義な示唆を与えていると認められる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。